

社說

## 日本銀行所有の黄金

日本銀行は政府と預合勘定に由り英蘭銀行に預入されたる英貨を併せ約八千二百萬圓の金貨及び金塊を所有し其内八千萬圓餘は兌換銀行券の引換準備に充るもの如し而して此八千餘萬の金は準備總額一億五百萬圓の内殆んど八割を當り銀は殘額僅に二割を占むるに過ぎず本來兌換銀行券は銀に對して發行するものなれば之が引換準備に銀以外の物品を所有する點に異數なるに其銀以外のもの即ち金と名くる物品が全額の八割を占むるとはます以て異數を爲さるを得ず開く英國銀行に於ては其發行金券の準備として金の四分一まで銀を所有し得ると云ふ我邦に於てもそれ位までを極度として準備中に金の混有を許すも敢て差支なれる可しと雖も今日の實際は然らず銀の方却て少なくして僅々金の四分一に過ぎずとは唯不思議と云ふ可きのみ日清戰争中兌換準備の漸く欠乏を告ぐるに方り日本銀行は金價の騰貴したるを幸に所有金塊の相場を引上げて準備の調拂を整ひその得たる利益を以て株金増資の資に充てたる事臨機の處置とは云ひながら我輩の感服せざる所にして斯の如き事を正當と爲さば信用薄弱なる小銀行が自己の損失を被はん爲め恣に其所有財産の價格を變動し以て世人を欺くも之を覺むるの辭に窮す可し然れども是れは別問題として深く茲に論究せ乍凡と金融の権軸と稱する日本銀行たる者が債の下落にして既に然り試に極端の場合を想像して諸國デモクラ・ト黨の意見通り金一銀十六の比價を實際に出現するとともならず斯る時易々數理は日本銀行なる者に於て知らざるの理なし其れを知るは我輩の體に推察舉げて之を補ふの止むべからざるに至る可し一割の下落にして既に然り試に極端の場合を想像して諸國デモクラ・ト黨の意見通り金一銀十六の比價を實際に推察する所なるに前は悟然として諒めざるものは是れを所を與へ其體に於て金銀兩者の價值を講ず中にも頗角金を費して無理にも之を断否せしめんとする所以は戰備費として金の貯藏を擧ぐるを以て一方には早晩我邦を金貨國たらしめんとする一種の空想より生じたる結果なりと曉る所にて間違なかる可し今の時勢に於て日本を金貨國にするの説は我輩の斷じて同憲せざる所れども金を用意するも至極尤もなる次第にして是亦要難なしと見え是等の點は實質上甚は總て國庫の事にして、國庫を充てたる事と少くして貨物貿易の金と多様な外貨の交換の容易な事と兩点も株式組合の實業な

もし以て其營業上に大危險を冒せと強ゆるの理は萬々  
ある可らず我輩の固く執て不可とする所なり然らば則  
ち之を如何せんと云ふに政府は自から要する所の黃金  
の額を定め之に相當する丈けの銀を償金中より買收し  
て之を日本銀行に授け其代りとして銀行現有の金を引  
揚げて可なり斯くすれば銀行は時價不定の黃金を抱て  
時として利し時として損するが如き冒險の苦を免かれ  
政府も亦萬一に備ふる基金を得て大安心の場合に至る  
可し事甚だ簡単なれども或は期る大金を徒に國庫中に  
閉却せしむるは經濟の法に非ずとの説もあらんか、然  
らば則ち時宜事情を視察し其幾分を横濱正金銀行に貸  
付けて運用を許すも前年松方大臣が爲換資本を給付

が……パドレフスキイの話ぢや類りに社會黨の費を讀んでらッしやるツて。」

此言はステバーンの耳には入らずして、却ていきまさあらう尋ねたり。「今の男は何です?」

「何でござンす?」

「今のは佛蘭西人サ。」

「われは技師。」

「何處で見掛けた様だ。」

「开ンな事はありますまいよ。露西亞にはまだ半旗さりやむませんもの。第一ペテルブルグにはほんの昨今ですよ。」

「貴娘は能く知つてゐるノ?」

妾と貴君との間あいだなりません。何なにされやうもんなら、  
リツアーノフは『あの男のこは女め房わらわです。』  
『それぢやア貴き君くみのおまえのかも知しれません。』  
『はア、貴君きくみにむかひます。』  
『僕わたくしに於けるのおこです。』

したるが如くなすも自から妙ならん其方法は幾様にも  
決して窮するふとなかる可し要は惟國家の都合と銀行  
の業務とを混同して日本銀行の爲めに危険なる金を所  
有せしめ其基礎を危からしむるを以て不可と爲すのみ  
しだら電(三十二)

「え、知つてます。あの人は今度南シナ海に鐵道を敷設しようといふので——其鐵道は父の領分を中貫しますから是非とも懲意になるわけなんです。それに、その人は我々同志の一人ですよ。」

第十九回 姦唄(上) 霹靂生

十五分後スマバーン リツアーノフはワンダ姫の内房に來りぬ。恰もレイモン ヴィベルはシエザヴァより姫への届物たる紙包を携へ來りてありき。

リツアーノフは極めて自重して見えたりき。されど其室に入てレイモンの姿を見るや二年間内訌せし情火は姫の慄異を絶して現はれぬ。

「左様ぢやありますまい。」  
「では鐵道の設計書でせう。ウクライナ地方には僕の  
地所もあるから此鐵道には中々關係ある……如何でせ  
うナ、設計書なら一つ見せて戴きたいもんんだが。」  
「設計書ぢやありませんよ、手紙ですよ。」  
ステバーンの顔は蒼くなりぬ。  
「ステバーン！如何したノ？」  
「如何もしません。自分の馬鹿に初めて氣が附きました。

で、講話する事も出来ず、鼻孔を顎はして上唇を  
反らしぬ。

レイモンは却て愕然としぬ。渠は心中に思ひぬ「何  
んだ、此野獣人は。此奴、姫にござつてゐ様だが、無  
作法な不躊躇を莫似としやがる。あれちやア速も駄目  
らしいが、はてナ、姫が惚れてるかしら……」

兎も角も爰は外して新米の客に席を譲るが上分別を  
者へしが、眼に見えぬ力が引留めて心ばかり歸らうと

「たよ。」と云ひついリッターノフは衣兜から一束の紙幣を出して「さア、爰に十萬ルーピルあります、之を貴様の事業にれ遣ひ下さい。猶ほ僕の財産は擧げて悉く献納する積りですから——今日は之で失敬します。」  
と云つて突と歸らんとしたとき。

「でも、最後は有りませんな？」  
「有ります」最う有りませんよ」と云ふて姫はレイモンに手を伸ばしぬ。柔しき情を諦めたる流盼を注ぎて夫れどなく慰めたるはレイモンの心と往々する夫々たる別を告げぬ。

「氣は確かに御心配なる。」  
『ステパー』、『ピワンダ』は暫くリッターの顔を睨み凝視して後、「何故貴君は打明けて仰しやらない。妾はちやんと知つてます。」  
「何を!」  
『貴君の本心を……詰らない都推を廻すもんぢやあり

不平を早くも着破りし故である。リツエーノフは此二人の容子を見て呻聲に似たる歎息を洩しぬ。

レイモンは内房を去りぬ。取調されし不テバーンとワンドとは職を解きし心を整理し神经をモミクニヤにしたる感情に耐ぜられて無事なりき。

「いや邪推ちやない、モリツアーノフは氣なりの悪る  
さうな顔をして、「邪推といふんちやないが、あの男は  
貴殿に懇してゐるンで、僕が来たのを知つて歸つたンで  
せう。貴殿は旅宿をやく権利を與へたんですか?」  
「貴君に對するもわの人に對するも妾の心は同様です  
よ。さうぞ、機知をやく權利なら、貴君が勝手に御用  
すが宜うと當んせう」と云つてワシガ威勢もぬ。

せア、唯相互の意地で若し一言を口外し目見交した  
ら或は<sup>たゞ</sup>互に抱付くかも知れざるを恐れたり。○  
ワシタ姫は<sup>おもて</sup>物に恐れざる女性なれども己れに懲  
したる此ノアーノヲと相對に座すると恐れて、無理  
にも<sup>うなづかず</sup>坐るが點と破らんとして、故自に無頼者なる  
素振を仕りて、

「本筋ではあるな、勘定に入るから。銀には金子、姫をやく補利は無いんだから貰ります。何卒差して下さ  
い。しかしあは貴様には惚れ抜いてゐる。僕は馬鹿で  
す、不義者です、無法です、實に無法です。あの佛蘭  
西の紳士がさも恍惚した眼で貴様を懲戒めた時には、  
併せて打撃したく事のないのを頭と胸へました。」